

# 補講 (質問会) のお知らせ

7月17日(土) 11:00 ~ 12:30

9-349 教室 (いつもと同じ)

- 自習・勉強会・質問会
- 講義内容は進まない
- 試験範囲は広げない
- 出席は義務としない
- 質問がなければ途中で帰る

本講義後半の主題は、

# 積分

である

## 高校で習った積分

- 逆微分としての「原始関数」  
 $f(x) = F'(x)$  となる  $F$  を求める
- 原始関数の区間両端での値の差としての  
「定積分」  $\int_a^b f(x) dx = F(b) - F(a)$
- 定積分は実は「面積」を表す

## 積分・微分の発見

歴史的には、実は順番が逆で、  
積分の起源の方が微分よりも遥かに早い

- 「積分」：面積を求める手法の探求  
(エジプト・ギリシャ: 2000年以上前)
- 「微分」：物体の運動の数学的探求  
(Newton, Leibniz: 17世紀)

それぞれ別のものとして発見されたものが  
実は密接に関連していた!!  
... 「微分積分学の基本定理」

## 積分法

- 統一的な求積法としての「定積分」
- 積分の上端を動かして、  
積分値を上端の関数とみる

$$F(x) = \int_a^x f(t) dt : \text{「定積分関数」}$$

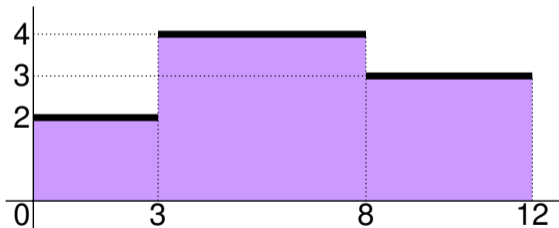
- 実は定積分関数を微分すると元の関数

$$\frac{d}{dx} \int_a^x f(t) dt = f(x)$$

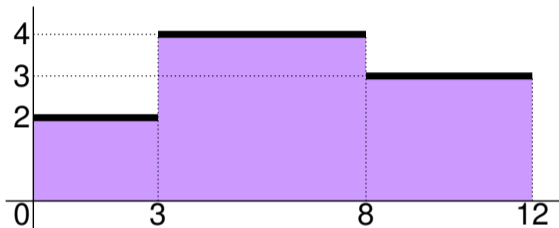
「微分積分学の基本定理」

## 積分の定式化

$$I = \int_0^{12} f(x) dx, \quad f(x) = \begin{cases} 2 & (0 \leq x < 3) \\ 4 & (3 \leq x < 8) \\ 3 & (8 \leq x \leq 12) \end{cases}$$



## 積分の定式化



$$I = \int_0^{12} f(x) dx$$

$$= 2 \times (3 - 0) + 4 \times (8 - 3) + 3 \times (12 - 8).$$

「積分」は「積和」である

## 積分の定式化

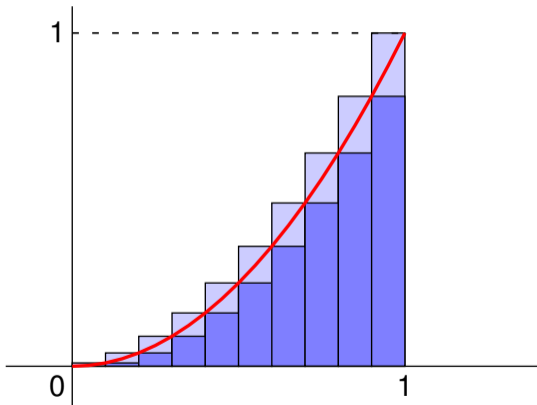
では、

$$I = \int_0^1 f(x) dx, \quad f(x) = x^2$$

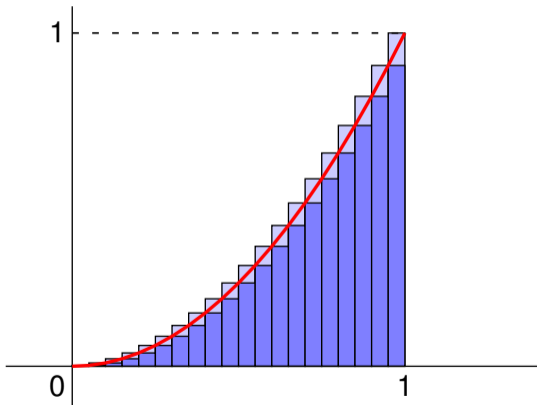
はどう考えるか？



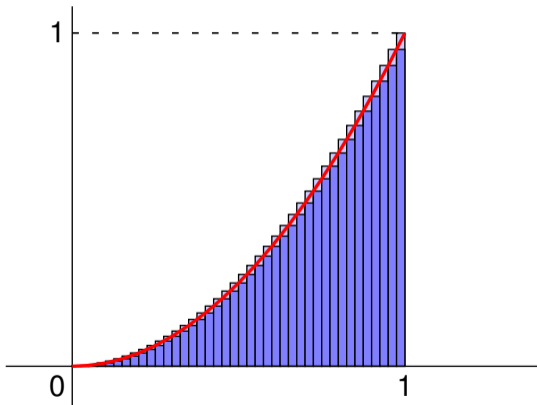
$$I = \int_0^1 f(x) dx, \quad f(x) = x^2$$



$$I = \int_0^1 f(x) dx, \quad f(x) = x^2$$



$$I = \int_0^1 f(x) dx, \quad f(x) = x^2$$



## 演習問題

$f(x) = x^2$  の  $[0, a]$  での定積分

$$I = \int_0^a f(x) dx$$

を計算したい。

分割  $\Delta_n : 0 = x_0 < x_1 < \cdots < x_n = a$  を  
 $n$  等分な分割 (即ち  $x_i = \frac{ia}{n}$ ) とする。

(1) 各小区間  $[x_{i-1}, x_i]$  での  
 $f(x)$  の下限  $m_i$  および上限  $M_i$  は?

$$(2) \quad s_{\Delta_n} = \sum_{i=1}^n m_i(x_i - x_{i-1}) \quad \text{及び}$$

$$S_{\Delta_n} = \sum_{i=1}^n M_i(x_i - x_{i-1}) \quad \text{を計算せよ。}$$

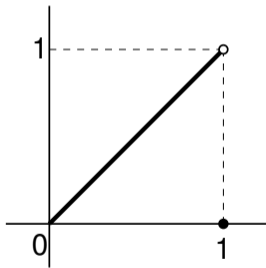
- (3) 任意の  $n$  に対して  $s_{\Delta_n} \leq I \leq S_{\Delta_n}$  であることから、 $I = \int_0^a f(x) dx$  を求めよ。  
(  $\lim_{n \rightarrow \infty} s_{\Delta_n}$ ,  $\lim_{n \rightarrow \infty} S_{\Delta_n}$  が、それぞれ存在して等しくなることを確かめよ。 )

## 上限・下限について(補足)

例:  $I = [0, 1]$

$$f(x) = \begin{cases} x & (0 \leq x < 1) \\ 0 & (x = 1) \end{cases}$$

関数  $f(x)$  ( $x \in I$ ) に  
最大値はないが、  
どう見ても 1 が  
“最大値みたいな値”  
である



## 上限・下限について (補足)

1 は最小の上界:

- 1 が上界である:  $\forall x \in I: f(x) \leq 1$
- 1 より少しでも小さくしたら上界でない:

$$\forall \varepsilon > 0: \exists x \in I: f(x) > 1 - \varepsilon$$

どんな (小さな) 正の数  $\varepsilon$  についても

或る (うまい / まずい)  $x \in I$  があって

$f(x)$  が  $1 - \varepsilon$  を超える

このことを、

1 が  $f$  の  $I$  における **上限** である

と言い、 $\sup_{x \in I} f(x) = 1$  と書く

## 積分の定式化

どんなに細かく切っても、  
その小区間内で定数になる訳ではないが、  
上下から見積もることは出来るだろう

$$\text{(下からの見積)} \leq \text{(面積)} \leq \text{(上からの見積)}$$

もしあれば

細かく切れば、  
上下からの見積もりが同じ値に近付くなら、  
これを「面積 (積分)」と呼んで良いだろう



## 積分の定式化

どんなに細かく切っても、  
その小区間内で定数になる訳ではないが、  
上下から見積もることは出来るだろう

$$\text{(下からの見積)} \leq \text{(面積)} \leq \text{(上からの見積)}$$

もしあれば

細かく切れば、  
上下からの見積もりが同じ値に近付くなら、  
これを「面積 (積分)」と呼んで良いだろう

## 積分の定式化

細かく切る方法は  $n$  等分が簡単そうだが、  
これだけを考えるのでは、話が旨く進まない

例えば、基本的な等式

$$\int_a^b f(x) dx + \int_b^c f(x) dx = \int_a^c f(x) dx$$

を示そうとすると...

## 積分の定式化

細かく切る方法は  $n$  等分が簡単そうだが、  
これだけを考えるのでは、話が旨く進まない

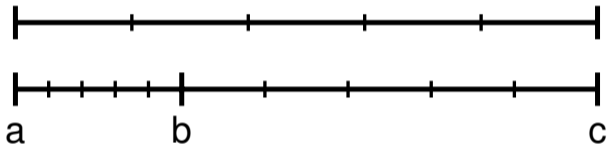
例えば、基本的な等式

$$\int_a^b f(x) dx + \int_b^c f(x) dx = \int_a^c f(x) dx$$

を示そうとすると...

## 積分の定式化

$$\int_a^b f(x) dx + \int_b^c f(x) dx = \int_a^c f(x) dx$$

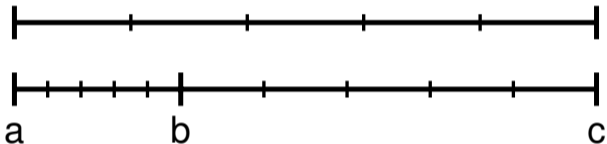


$n$  等分点が食い違って比較し難い

→ 予め「全ての分割」を考慮に入れて定義せよ!!

## 積分の定式化

$$\int_a^b f(x) dx + \int_b^c f(x) dx = \int_a^c f(x) dx$$



$n$  等分点が食い違って比較し難い

→ 予め「全ての分割」を考慮に入れて定義せよ!!

余談 …… 現代数学の手法の特徴 (の一つ):

「苦勞を先に買っておく」

定式化の段階で先に苦勞をしておくと、  
後で証明が楽になる

人間の都合でなく、  
数学のものたちの気持ちに、  
我々の気持ちを合わせる

その代わりに、  
人間には解り難くなることもあるけれど

余談 …… 現代数学の手法の特徴 (の一つ):

「苦勞を先に買っておく」

定式化の段階で先に苦勞をしておくと、  
後で証明が楽になる

人間の都合でなく、  
数学のものたちの気持ちに、  
我々の気持ちを合わせる

その代わりに、  
人間には解り難くなることもあるけれど

余談 …… 現代数学の手法の特徴 (の一つ):

「苦勞を先に買っておく」

定式化の段階で先に苦勞をしておくと、  
後で証明が楽になる

人間の都合でなく、  
数学のものたちの気持ちに、  
我々の気持ちを合わせる

その代わり、  
人間には解り難くなることもあるけれど



では、少々苦勞はあるが、

## 「積分」の定義

をきちんとしましょう

## 積分の定義

仮定:

- 積分区間  $I = [a, b]$  : 有界閉区間
- 被積分関数  $f : I$  で 有界  
即ち、

$$\exists m, M : \forall x \in I : m \leq f(x) \leq M$$

## 「積分」の定義の方針

- 区間を分割せよ
- 各区間で上下から見積もれ
- それを足し上げよ
- 以上を全ての分割について考えよ
- 上下からの見積が一致するか？

## 「積分」の定義の方針

- 区間を分割せよ
- 各区間で上下から見積もれ
- それを足し上げよ
- 以上を全ての分割について考えよ
- 上下からの見積が一致するか？

## 「積分」の定義の方針

- 区間を分割せよ
- 各区間で上下から見積もれ
- それを足し上げよ
- 以上を全ての分割について考えよ
- 上下からの見積が一致するか？

## 「積分」の定義の方針

- 区間を分割せよ
- 各区間で上下から見積もれ
- それを足し上げよ
- 以上を全ての分割について考えよ
- 上下からの見積が一致するか？

## 「積分」の定義の方針

- 区間を分割せよ
- 各区間で上下から見積もれ
- それを足し上げよ
- 以上を全ての分割について考えよ
- 上下からの見積が一致するか？

## 積分の定義

$\Delta : a = x_0 < x_1 < x_2 < \cdots < x_n = b$   
: 区間の分割

$\delta(\Delta) = \max_i (x_i - x_{i-1})$  : 分割の最大幅

$m_i = \inf_{x \in [x_{i-1}, x_i]} f(x), M_i = \sup_{x \in [x_{i-1}, x_i]} f(x)$   
: 各区間での下限・上限



## 積分の定義

$$s_{\Delta} = \sum_{i=1}^n m_i(x_i - x_{i-1})$$

$$S_{\Delta} = \sum_{i=1}^n M_i(x_i - x_{i-1})$$

: 上下からの見積もり

→

$$s_{\Delta} \leq \text{“面積”} \leq S_{\Delta}$$

分割  $\Delta$  を色々考えて、見積もりを精密にせよ。

## 積分の定義

全ての分割  $\Delta$  を考えて、

下からの見積もりをどこまで上げられるか

$$\longrightarrow s := \sup_{\Delta} s_{\Delta} : \text{下積分}$$

上からの見積もりをどこまで下げられるか

$$\longrightarrow S := \inf_{\Delta} S_{\Delta} : \text{上積分}$$

$$s \leq \text{“面積”} \leq S$$

一般に  $s \leq S$  であるが、 $s = S$  とは限らない!!

## 積分の定義

全ての分割  $\Delta$  を考えて、

下からの見積もりをどこまで上げられるか

$$\longrightarrow s := \sup_{\Delta} s_{\Delta} : \text{下積分}$$

上からの見積もりをどこまで下げられるか

$$\longrightarrow S := \inf_{\Delta} S_{\Delta} : \text{上積分}$$

$$s \leq \text{“面積”} \leq S$$

一般に  $s \leq S$  であるが、 $s = S$  とは限らない!!

## $s \leq S$ となる例

$$I = [0, 1], \quad f(x) = \begin{cases} 1 & (x : \text{有理数}) \\ 0 & (x : \text{無理数}) \end{cases}$$

任意の分割  $\Delta$  に対し、

$$s_{\Delta} = 0, \quad S_{\Delta} = 1$$

従って、

$$s = 0 \leq S = 1$$

## 積分の定義

$s = S$  のとき、これが“面積”と呼ぶべき唯一の値  
この時、

$f$  は  $[a, b]$  で**積分可能 (integrable)**  
と言い、

この値を

$$\int_a^b f(x) dx \quad \left( \text{または} \int_I f(x) dx \right)$$

と書いて、

$f$  の  $[a, b]$  に於ける**定積分 (definite integral)**  
と呼ぶ

例:

$$I = [0, 1], \quad f(x) = \begin{cases} 1 & (x = \frac{1}{2}) \\ 0 & (\text{それ以外}) \end{cases}$$

任意の分割  $\Delta$  に対し、 $s_{\Delta} = 0$

一方、 $\forall \varepsilon > 0$  に対し、 $S_{\Delta} \leq \varepsilon$  なる分割  $\Delta$  が存在

従って、

$$s = S = 0 = \int_0^1 f(x) dx$$

例:

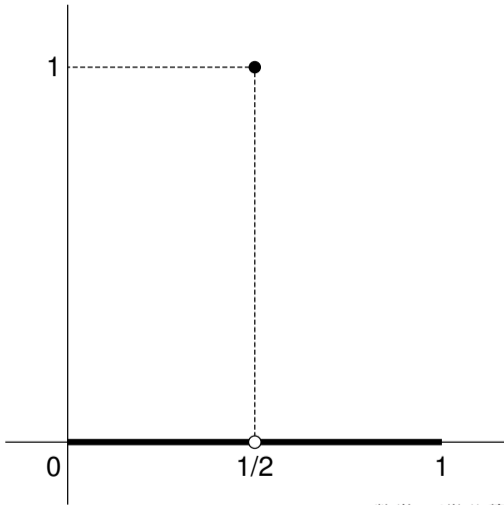
$$I = [0, 1], \quad f(x) = \begin{cases} 1 & (x = \frac{1}{2}) \\ 0 & (\text{それ以外}) \end{cases}$$

任意の分割  $\Delta$  に対し、 $s_{\Delta} = 0$

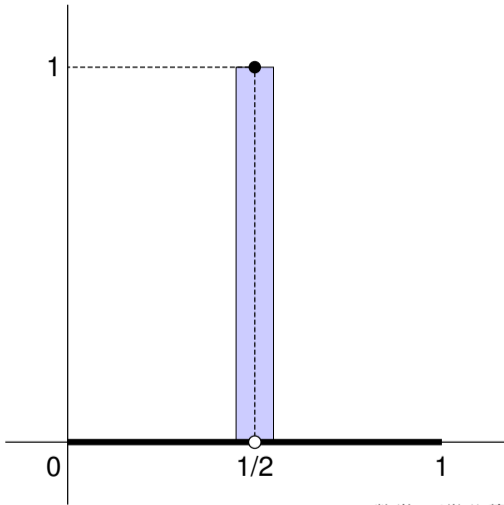
一方、 $\forall \varepsilon > 0$  に対し、 $S_{\Delta} \leq \varepsilon$  なる分割  $\Delta$  が存在

従って、

$$s = S = 0 = \int_0^1 f(x) dx$$







任意の分割を考えたので、  
次のような事実の証明が簡明になった

$a < c < b$  とし、

区間  $[a, b]$  に於ける下積分を  $s(a, b)$  と書くと、

$$s(a, b) = s(a, c) + s(c, b)$$

同様に、

$$S(a, b) = S(a, c) + S(c, b)$$

任意の分割を考えたので、  
次のような事実の証明が簡明になった

$a < c < b$  とし、

区間  $[a, b]$  に於ける下積分を  $s(a, b)$  と書くと、

$$s(a, b) = s(a, c) + s(c, b)$$

同様に、

$$S(a, b) = S(a, c) + S(c, b)$$

$$s(a, b) = s(a, c) + s(c, b)$$

$$S(a, b) = S(a, c) + S(c, b)$$

---

従って、

$f$  が 区間  $[a, c], [c, b]$  で積分可能  
 $\implies f$  は区間  $[a, b]$  でも積分可能で、

$$\int_a^b f(x) dx = \int_a^c f(x) dx + \int_c^b f(x) dx$$

ところで、積分を定義するのに  
全ての分割を考えることにしたということは、

- (前回の演習のように)  
 $n$  等分だけを考えたのでは不十分なのか？
- 実際に計算することは不可能なのではないか？

→ 実は大丈夫で、次の定理が成り立つ

ところで、積分を定義するのに  
全ての分割を考えることにしたということは、

- (前回の演習のように)  
 $n$  等分だけを考えたのでは不十分なのか？
  
- 実際に計算することは不可能なのではないか？

→ 実は大丈夫で、次の定理が成り立つ

ところで、積分を定義するのに  
全ての分割を考えることにしたということは、

- (前回の演習のように)  
 $n$  等分だけを考えたのでは不十分なのか？
  
- 実際に計算することは不可能なのではないか？

→ 実は大丈夫で、次の定理が成り立つ

## Darboux の定理:

$(\Delta_n)_{n=1}^{\infty}$  : 分割の列に対し、

$$\delta(\Delta_n) \rightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty)$$



$$\exists \lim_{n \rightarrow \infty} s_{\Delta_n} = s, \quad \exists \lim_{n \rightarrow \infty} S_{\Delta_n} = S$$

(証明略)

つまり、実際の計算は、

$\delta(\Delta_n) \rightarrow 0$  となるような分割の列  $(\Delta_n)_{n=1}^{\infty}$   
(で計算し易いもの) を一揃い考えれば充分



## Darboux の定理:

$(\Delta_n)_{n=1}^{\infty}$  : 分割の列に対し、

$$\delta(\Delta_n) \rightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty)$$



$$\exists \lim_{n \rightarrow \infty} s_{\Delta_n} = s, \quad \exists \lim_{n \rightarrow \infty} S_{\Delta_n} = S$$

(証明略)

つまり、実際の計算は、

$\delta(\Delta_n) \rightarrow 0$  となるような分割の列  $(\Delta_n)_{n=1}^{\infty}$   
(で計算し易いもの) を一揃い考えれば充分

さて、先の例のように、  
積分にとって、不連続性は致命的ではない

逆に言うと、連続だからと言って、  
積分可能かどうかは自明ではない

しかし、幸いな (偉大な) ことに、実は、

閉区間で連続な関数は積分可能である!!

さて、先の例のように、  
積分にとって、不連続性は致命的ではない

逆に言うと、連続だからと言って、  
積分可能かどうかは自明ではない

しかし、幸いな (偉大な) ことに、実は、

閉区間で連続な関数は積分可能である!!

さて、先の例のように、  
積分にとって、不連続性は致命的ではない

逆に言うと、連続だからと言って、  
積分可能かどうかは自明ではない

しかし、幸いな (偉大な) ことに、実は、

**閉区間で連続な関数は積分可能である!!**

定理:

$f$  : 閉区間  $I = [a, b]$  で連続  
(このとき自動的に有界)



$f$  :  $I$  に於いて積分可能

更に、今の証明を振り返ると、

$$S(a, x) = s(a, x) = \int_a^x f(t) dt$$

(上端  $x$  の関数で、定積分関数と呼ぶ)  
が  $f$  の原始関数になっていることが判る

定理:

$f$  : 閉区間  $I = [a, b]$  で連続  
(このとき自動的に有界)



$f$  :  $I$  に於いて積分可能

更に、今の証明を振り返ると、

$$S(a, x) = s(a, x) = \int_a^x f(t) dt$$

(上端  $x$  の関数で、定積分関数と呼ぶ)  
が  $f$  の原始関数になっていることが判る

## 微分積分学の基本定理

$f$  : 閉区間  $I = [a, b]$  で連続のとき

- $\frac{d}{dx} \int_a^x f(t) dt = f(x)$

即ち、 $F(x) = \int_a^x f(t) dt$  とおくと、

$F$  は  $f$  の原始関数 (の一つ)

- $F$  を  $f$  の原始関数 (の一つ) とすると、

$$\int_a^b f(t) dt = F(b) - F(a)$$